

葬送文化研究会

会報

平成10年9月 第1号

会長あいさつ

天野

勲



会員ならびに幹事皆様には日々本会運営にご尽力いただきありがとうございます。

省りますと葬送文化研究会発足以来十二年を経て、昨年三月新しい体制のもと第一回の総会が開催できましたのも、八木澤壯一先生と山床節子さんの御指導と会員各位のご協力の賜であると感謝しております。去る二月十三日の第二期総会に当り、再度会長職を続けさせていたゞくことになりましたが、生来微才でありますので、ご迷惑をおかけすることもあるでしょうが、よろしく御鞭撻の程お願い申しあげます。これまでの月例会にてそれぞれの分野にて活躍しておられる各位の研究発表・それに伴う意見交換より得られた知識が日々の仕事に役立っていることと思います。

二十一世紀に向かい社会状勢も急速に変遷して行くでしょう。それと高齢社会に対応するために葬送関連の事情も様々な型態が生ずることは必須であろうと考えられます。

しかし「葬送文化」を標榜する本会としては常に「温故知新」の初心を忘れずに叡智を結集し、研鑽を重ねてこそ、葬送文化研究会の本来の姿であり進むべき道であると確信致しております。
私も「反省と発展」を心に刻み葬送文化を次の世代に継承できますよう努力したいと思います。皆様の更なる精劔とご協力をねがいする次第です。会報一号を発刊するに当り、御礼と感謝の心を愛をこめておつたえ致し挨拶とさせていただきます。

(葬送文化研究会・会長)

日

次

活動報告

一九九七年度活動

会長あいさつ

天野 勲

四月定例会 台湾の葬祭現状報告

六月定例会 「県境を越えた火葬場」

八月定例会 「宗教者から見た現代葬儀」

葬送文化研究会の飛躍にむけて

十四年をふりかえって

八木澤 壮一

沖縄の葬送を垣間見て

天野

昌司

葬送文化研究会の飛躍にむけて



八木澤 壮一

地域的または少数民族に関わるものがある
『貴州民族墓葬の文化』席克定著 貴州人民出版社 一九九〇。
『中国少数民族の喪葬』夏之乾著 中華本土文化双書 一九九一。
『四川の喪葬文化』霍黃偉著 四川人民出版社 一九九二。
『チベットの古代墓葬制度史』霍黃偉著 四川人民出版社 一九九五。
あります。歴史的な記述が中心で、しかも漢民族以外のいわゆる少数民族を取り上げているわけです。ここで見られるように「葬送」の文字がありません。不思議に思って広辞苑を引いてみました。「葬送」は「送葬」に同じとして、「屍を墓まで葬り送ること。また葬るのを見送ること。」とありました。上の中国の書名では、これにあたる表現が「喪葬」です。念のため広辞苑では「死者の喪と葬式」とありましたが、なんとかくしつくりと来ません。「墓葬」の方は載っていませんでした。

文化としての「葬送」が社会にとって注目を浴びるようになってきています。第二期の葬送文化研究会もますます豊かな内容になっていくものと期待しております。これから研究会活動の柱として葬送に関する博物館、図書館さらに大学づくりが目標になってくるでしょう。

ここでは、「葬送」のフィールド、いわば何を扱うかについてあらためて考えてみたいと思います。

その一つとして日本の葬送文化の基礎となっていると考えられる中国に眼を移して見ました。たまたま私の手元にあり、しかも一般の人達を対象にした書籍を手がかりにします。本のリストをまず紹介しましょう、書名は分かりやすいように日本風に多少手を入れてあります。

送葬全般を扱ったものとしては

- 『中国古代の喪葬習慣』 周蘇平著 陝西省人民出版社 一九九一。
『喪葬の儀観』 宋德胤著 中国青年出版社 一九九一。
『中国の墓葬文化』 蔡希勤著 中国城市出版社 一九九五。
『中国の死亡文化大觀』 鄭小江主編 百花洲文芸出版社 一九九五。
『原始時代の生命神と生命觀』 楊福泉著 雲南人民出版社 一九九五。

「葬送」もありました。動詞で「①葬り去る。②（地位・金錢・物を）完全に失う。」という意味で、なんとなく納得しました。

「喪」は名刺で、日本語と変わりません。「吊喪」でお悔やみを述べる、お悔やみに行く、となります。「喪服」「喪家」「喪礼」も同じ使い方です。「喪棚」が葬式用の小屋、「喪事」が葬儀、「喪条子」が出棺の日時などを書いて門口にはる礼、「喪帖子」が葬式通知と言うことになります。「喪葬」は動詞で葬儀を執り行い、死者を埋葬する意味です。

葬送文化をどんな広がりで捉えているかを、前出の本から見ることにします。一番一般的そうな図書として北京師範大学の宋先生の『喪葬儀観』

を例に、中国での葬送文化の輪郭を見てていきます。

「まえがき」で生死は自然現象ではあるが、社会性と文化性の強い事柄だとする。さすが中国の書物、ここでエンゲルスの『労働に見られる猿から人への変化』から、人は「全ての動物の中で最も社会化した動物」と引用されています。

目次では、起源と伝承からはじまり、喪葬儀式、喪葬中の歌と舞、死装束、喪服と服喪、喪葬の類型、殉葬、墓地、葬具、祭墓からなっています。

それぞれの項目は、たとえば「死装束」では死装束習俗の起源、考古学での実証、世界を驚かせた玉衣、死装束の意義、死装束の民族性、死装束習俗の伝承が取り上げられました。「喪葬の類型」には、野葬、樹葬、火葬、水葬、天葬、土葬、腹葬、懸棺葬、複合葬、塔葬、木架葬と豊富でした。

このように広い視点から、かつ具体的にとりあげています。これからも、世界の各地での葬送文化を明らかにして行きたいと思っています。

(葬送文化研究会・顧問)



山 床 節 子

すべては八木澤氏へのインタビューから始まった。今からちょうど十四年前、一九八四年の初夏のことである。

初対面の八木澤氏と話しているうちに、「葬送という分野には体系化された資料がなく、何を調べるにも一から方々を探しまわらなければならぬ」という点で意見が一致し、八木澤氏から、一緒に勉強会をやりませんかという提案があった。

それから、名称を決め、参加を呼びかけるチラシを作り、互いに葬送文化に関心のある友人、知人に声をかけて、九月、二十余名が参加して発足会が開催された。

その場では①拠点を東京電機大学建築学科八木澤研究室内に置く②同大学会議室で毎月一回定例会を開く③会費はとりあえず資料のコピー代等で年間千円とする—といったハード部分の大枠が確認され、これから何をやっていくかというソフト部分については、参加者一同、発起人である八木澤氏と山床に一任するということであった。

「研究の場」を作るというのが当時の最大の目的であり、発起人双方ともにこれをやりたいという具体的なプランがあつたわけではないが、「な



十四年をふりかえって

るべく学問的に研究していらっしゃる方より、現場で職業として永年にわたりてかかわってこられた方々」（呼びかけのチラシより）の生の声を聞き、「アカデミックな手法に走りすぎることなく、あくまで実際に、現実はどうであったか、どうであるかということを地道に追いかけ、積み重ねていきたい」（同）という基本方針は一致していた。

発足会に集まつた人々の意見をききながら何をやっていくのか、その場で煮詰める予定だったが、初めての顔合わせということもあってか、特に意見は出てこなかつた。

これから、とりあえず定例会を開催しながら折に触れて何をしていくか、八木澤氏との話し合いで会員の意見、要望をききつつ軌道修正していくことになり同氏の提案で、まずは会員諸氏に、順次各自の問題意識を踏まえつつ、それぞれが職業として係わっている分野の現状報告をしてもらうことになった。多彩な顔触れが集まっていたので、これは、葬送というのにさまざまな視点から触れる良い機会になつたのではないかと思う。

十二月には杉山昌司氏の提案で、同氏が設計された戸田葬祭場を見学。これを機に、一年に二回、定例会として葬送関連施設の見学を取り入れるとともに、地方会員との交流や各地の葬送文化見聞のため、年一回、一泊二日の研修旅行を始めた。

このようにして少しずつ形が整い、回を重ねてきたところで、葬文研としての研究成果をどのように形にしていくのか、というようなことを一つの課題として意識するようになり、財団が募集していた助成金付きの研究に応募したり、テーマ別の共同研究を企画したり、といくつかの試みを行なつたが財団の方は応募した研究テーマが採用されず、共同研究の方は会員の積極的な参加が得られず、いずれも不首尾に終わつた。

とくに共同研究の方は、定例会を五、六回ぐらい費やして、話し合いを

重ね、研究テーマを四つぐらい（火葬場、墓地、式場、葬儀）に絞り、各会員に従つて会員をテーマ別のグループに分け、まとめ役を決め、数ヶ月後に研究発表を行なう、というところまでいったが、まとめ役を務めた会員諸氏の奮闘虚しく、いわば「立ち消え」の形になつてしまつた。

確かにそれが本業を別にもつてゐるので、中には定例会に出席するのがやっとという方もおられるだろう。しかしながら数年前、八十名近い会員に対して郵送で共同研究のためのアンケート調査を実施したとき、回答があつたのはわずか数名にすぎなかつた。

このことをどう考えるべきか。

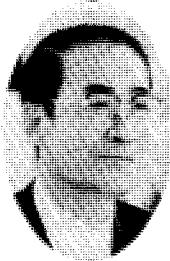
結局は、会員一人ひとりに主体的に係わる姿勢がなければ何も動かない、ということになるのではないか：ここまで書いてふと、近々実施される参院選挙のことが頭に浮かんできた。アンケートに回答しないといふのはつまり「棄権」のようなものなのかもしれない。

共同研究の試みが「挫折」してから、方向性を見失つてしまつたような感じで、折に触れては常連の会員諸氏の意見をきいてみたところ「サロン」だと思っているという声があつた。同好の士の社交の場。共通の関心をもつ人々の情報交換、意見交換の場……なるほど。確かに普通なら顔を合わせるチャンスはなさそうな人と人とが、この場で名刺交換しているシンをいく度見たことか。そして確かに、葬送に関わる様々な分野の人人がこれだけ一堂に会する場は今のところ他にはない。そのことに意味を見出すのも一つの考え方だろう。しかし、ある規模を越えてしまうとサロンとしては成立しえなくなるのではないか。

このように、最後まで揺れながら、十二年目を迎えた。

（葬送文化研究会・顧問）

意欲の合意



浅香勝輔

も、幹事の一人となつて、新鮮で、のびのびした会の育成のために努力しなければならないことになった。

事務連絡などは二村さんの尽力によって、数段すぐれた運びになつていることは喜ばしいが、率直に言って、新しい会は、どういう精神を担つて再発足するのかという命題を抜きにしてスタートした感が深い。葬送文化の具体的・実証的分析とか、具体的な目標を明確にする必要がある。葬送文化の前進のための、新しい研究会員の意欲の合意が必要である。葬送

葬送文化には、長い伝統を受け継いできた床しさが滲み出でていて、古くから日本人が非常に大切に心得てきた文化の中味の一つであつたはずである。

昭和六十二年の早春であつたと記憶しているが、八木澤さんから葬送文化研究会と称する会を作りたい、ついては参加してほしい、と言われたのが、この会に関わりをもつた初めであった。

研究者として加入している幾つかの学会が、あまりにも硬直的になりがちで、巨大組織の官僚主義や合意形成のパターン化による妥協の産物として形骸化してしまっていることに、飽き飽きしていただから、少人数で多種な分野の人たちが参加して発足したこの研究会に、大きな期待を抱いていなかつたと言つたら嘘になる。

だが、共同研究では、ひとりひとりの堅実な姿勢が要求される。ひとりの多弁な会員の跳ね上がり的発言で、そちらへ流されてしまうようなことがあつては、共同研究は阻害されるし、時間の無駄遣いである。

また、研究会の会員獲得への努力も理解できるのであるが、新鋭や若手スタッフの増加は、挨拶も満足にできぬ社会性の欠けた青年会員を増やすことではなくて、山田さんのように自己の研究成果を誠実に真摯に、会員の前で開陳できる若手会員の拡大であろう。

いろいろな分野から参加されている、いわば混成部隊であるこの研究会の危機を繰り返さないためには、有効な対応力を、全員が責任を負う形で考え、機能面への配慮を十全にすることに尽きると思う。

若干の気まずい思いと、後味の悪さを感じながら、会報創刊に当たつて、率直な気持ちを披瀝した。

その反動で、近年の新しい会への脱皮という、いわば一種の革命となつて現われたかとも考える。それまで傍観者としてこの会に参加していた私

(日本大学理工学部教授)

川柳と心療内科



後 藤 尚 孝

近年、癌で亡くなる人は、十人中四人と言われる。告知を受けた人は、筆舌に尽くし難いほど、心は落ち込むことだろう。前向きに病気と闘うことこそ、より長生きの秘訣と考えられる。

最近、病院内に診療内科という分野が新設され、心の医療を施すことで注目されて来ているという。日本深層心理学会会長の上原義貞先生が、

「身心一如の健康法」と題し、浄土宗総本山知恩院にて講演され、大変感銘を受けた。

人間の臓器細胞は、六十兆匹の細胞からなり、病気発生により、抗生物質や放射線による治療、或はメスによる悪い部分を取り除く方法を見るなど、これらは最終的な治療であり、医学の本質から行くと大間違いなのではないかという疑問が生じている。むしろ、心の持ち方が、与える医学の予防と考え、心療内科の分野が尊重されて来たという。医者ではないが、心を癒す分野が重要な部門となつて来ていると言う。

それには、川柳でもつて本当の笑いを誘い、創作と笑いで、心の固さをほぐす。笑いには、「笑う門には福来たる」と言われる様に、淨血力、淨血作用があるという。そこで、川柳の日本大賞を募集、笑いによって病気の予防と、落ち込んだ心の固さをほぐす効果を指導している。

(天然寺住職)

○カラオケを歌う極楽、聞く地獄。

○一戸建て、出て来る場所は熊も出る。

○長生きの家系と聞いて嫁おびえ。

○検便を忘れた友に分けてやる。

○ベランダにアロエが見える医者の家。

○グレテヤル、それなら見ていろボケテヤル。

○運動会、ぬくなその子は課長の子。

○七五三、母の手潮に子がおびえ。

○かわいい子、旅をさせたが帰らない。

○合わぬはず、爺さんそれは私の歯。

○爺ちゃん寝顔にハンカチ誰かけた。

○勘違い、コタツで母の手をにぎり。

これを読んだ人の思わず苦笑いした顔が、目に浮かぶのである。

以上、こうした感性をみがくことにより、気持ちの落ち込んだ人に、川柳効果があるという。心の持ち方は、与える医学の予防となる。春山茂雄氏の「脳内革命」によれば、脳から出るホルモンが生き方を変えるといふ。いくらおいしく食物を料理しても、落ち込んだ心では、おいしい物でも、消化も悪く、栄養にもならない。確かに心と身体の健康には川柳を創作し、人生を笑いでうづめつくすことも、一つの良い方法かも知れない。

我々、仏教者は、とかく葬式仏教と思われがちな点反省し、このストレスの多い社会で、少しでも心の癒される場を提供すると同時に、常に心を開いて、一人でも多くの人々を受け入れ、共に笑い合えるそんな姿勢でありたい。

見えるものは、見えない ものにふれている



柴田 千頭男

わたしが今住んでいる家の庭には、かなり大きな四本の木が、四方に枝を広げている。そのほかに紅葉、姫りんご、椿などなども、季節になると、その葉や花びらをいたる所に撒き散らす。近所となりに気がねをし、年がいもなく梯子をかけ、木のぼり、家内はやめてと言うが、手入れをやる。しかし、とても、とても追い付かず、いたちごっこである。掃くそばから、木の葉は山となる。でも緑がどんどん消えてゆく都会生活の中で、通りかかる人に、少しばかりアシスになるだろう、という思いもあり、根元から切ってしまう気にはなれない。だが、落ち葉の季節や、葉が入れかわる頃になると、あらためて気づくことがある。こちらはただ「どうも木の葉が散らばってすみません」とひたすらあやまる以外にないのだが、「気にしないでください。自分の庭でもないのに、自分の庭のように、いつも楽しませていただいているのですから」と言ってくださる隣人もいる。考えてみれば、うちの入学など桜の花の季節には、見事に花に埋まるのだが、隣の学校の桜がこちらに枝をのばしてきているのがほとんどだ。しかし学長は新入学生への挨拶では、「ことしも桜の花とともにみなさんをお迎えできて嬉しい」と言つてはばかりない。隣の庭の効力である。また、立ち止まって「あれは、姫りんごでしょう、きれいな花ですねえ」と言つてくれる通りがかりの人もいる。それも嬉しいことだ。しかしそうい

う人ばかりではない。「お宅の庭の木の葉が一杯落ちて迷惑せんばんです」とけしきばむ人もいる。これは事実だから反論できない。「すみません」と言うしかない。京都などで、落ちた紅葉の葉が色なす道を歩くあの風情は特別だが、そこまでいかないまでも、木の葉は散つても、これはごみではない。人の心の持ち方では、これも自然の美そのものである。それが見える人と見えない人がいる気がするのです。

死や葬儀は、ある意味で自然そのものである。しかしそれを、あつたら困るという人と、それがあるからいいのだ、と言う人もいよう。死や葬儀を一番嫌な奴としか見れない人と、生まれて、そして死ぬという自然の流れをそこに見て、自らの生き方もそこから見つめようという人もいる。一枚の葉を手に入れれば、宇宙全体が手に入る、という言葉を師から聞いて、小倉遊亀さんは絵の道に入ったそうだ。死を見ることも同じだろう。そこから嘘のつけない人生や人間存在の実相が見えてくる、とわたしは思う。だから、葬送文化研究会は、わたしにとり一枚の木の葉のよう、そこからすべてが見えてくるような貴重な学びの時である。とくに若い方がこの分野で、あんなに真剣に、課題に取り組んでいるのを知り、わたしはある詩人が教えてくれた言葉を思い起こす、『見えるものは、見えないものにふれ、聞こえることは聞こえないものにふれ、わかることは、わからないことにふれている』。人生はこの二つがふれあう場と時である。死者は語ることを止める。しかし向こう側がみえてくる、聞こえてくる、わかってくる。そういう接点ととして葬送があるのでないか。

いま一つ。わたしはキリスト教会の牧師であるし、関係大学で長く教鞭をとっている人間である。日本で言えば、葬儀はまず仏教で行なわれるのが普通であるし、事実、明治二十年ちかくまでは、法をもってキリスト教葬儀を禁じていたお国柄であった。しかし『死』は普遍である。生きとし生ける者、すべてにかかる課題である以上、人を相手にする宗教が、

お互にこの一点でこそ話しあうべきだし、それができないなら、その存在もあやしい、とわたしは思っている。傲慢だらうか。本音を言えば、それがわたしの心のどこかにあって、この研究会を大いに楽しみにしてもらひるのであります。今後ともよろしくご指導ください。ご発展を祈ります。

(ルートル学院大学教授・牧師)



お墓の話しあれこれ

稻村吉彦

お彼岸のお墓なんでも相談という、電話による相談会がある。これは石材店の団体がボランティアとして、石材店のベテランなどが担当する。私も応援に駆けつける。
最近の顯著な傾向として、故郷から墓を移転したい、という希望が多い。これは、故郷から学校へ行くため上京し、やがて東京で就職し、家庭をもち、子供たちも独立し、夫婦一人になり、自分も老いて、故郷に墓参にゆくのが、かなりしんどくなつた。また、故郷にも世代交代があり、兄弟の子の時代と移り、甥や姪にもあまり馴染みがなく墓参の度に気兼ねせざるを得ない。

それならお墓を東京近辺に移そうか、となる。なかには、祖先のお墓を東京に移しては、祖先が怒り、なにか祟りがあるのでないかと心配する

人もいる。また、移転する手続きが分からず不安がる人もいる。改葬許可を得て、お骨を持ってこられると回答すると、俺の家の墓から、俺の親父の遺骨を持ってくるのに、なんで第三者の許可とか役所の許可がいるのか、と食つてかかる人もいて、始末に困ることもある。
国の法律で、遺骨の移動について規制されている。そんな面倒なことはできないので、便法を教えろ、といわれても、法の目を掠めていい加減なことを回答することもできない。

では、サービスにならぬではないか、ときり返され、往々にして、サービスを強要する向きもある。私も同様だが、我々日本人は、自分の都合のよい方向の回答がないと、或いは自分の利益にプラスがないと、サービスではないと思い込む傾向がある。昔の本に「水と安全タダ」と思つているとあつたが、サービスは無料という思い込みも危険である。

タダより高いものはない、という格言もある。

墓石の色について、見本と違う、という相談も結構多い。我々は大量生産、大量販売の悪しき習慣に毒されている傾向がある。

大量生産の工場製品なら、すぐさま新しいものに交換してもらえば済む。しかし天然自然のものには、同じ山からきり出した石でも、部位によって微妙に差があるのはやむを得ない、それを厳密に見本と比較して、ほれこのとおり、とやられると、石材店も困惑してしまう。確かに高額な商品である、一生に一度のものであろう。また、色彩については感覚的なものもあり、微妙なところはなかなか判断しにくい。黒と白の違いは歴然としているが、同じ黒の違いは判断に迷う。

以上のことを説明しても、電話で色の相談は回答ができないのに、石屋の団体だから、石屋の味方をしている、と非難される。

石材店も、天然自然のものだというPRをしてこなかつたせいもある。さらに、素人になにがわかるか、専門家に任せろ、という態度で商売を

してきた、葬儀社も同様だろう。時代はいまやそうした事を許さぬ時代になつた。

祭祀財産である。墓所、墓石等は、祭祀財産である。

これには当然承継という行為がつきまとう。

民法第八九七条は、この承継について、三つの順位を示している、一は被相続人の指定した者が承継する、二は慣習による、三は慣習が明らかでないとき家裁が決定する。

指定された者ということも、定着していないが、慣習によるということも誤解が多い。

父親も長男で相続したから、自分も長男だから当然承継できる、と思い込み、母親も兄弟も当然のこととして、怪しまぬ。

これは家督相続の習慣が長年に亘り、我が国に定着したことの証左であろう。戦前までは祭祀財産は家督相続の特権に属する、とされていたが、現行民法は、一般相続財産とは別のルールによることを、規定している。

長男は、結婚後嫁さんが母親と折り合いが悪く、長年音信不通であった、その間次男が両親と同居して、面倒をみてきた、父が亡くなつたとき、母親が墓所を購入した、その母親が亡くなつたとき、長男が出てきて、葬儀は長男である自分の名前で執行する、また墓の名義も自分が承継する、といい出した。

次男も葬儀は長男だから、と顔をたてたが、墓の名義の問題には抵抗を感じた、という相談であった、なくなつた母親が、以前に長女に送った手紙があつた、それには墓は次男に継いで貰いたい、という意思がはつきり記されていたので、私は、その手紙を根拠にして長男の申し出を断りなさい、とアドバイスをした。指定というのは、要式性を問わないし故人の意思が明瞭に分かればよく、また、近親者とはかぎらない、さらに相続財産を放棄した者や、限定相続した者でも、可能な筈である。相続財産とは別

のものだから。

長男相続が慣習とはいっていい。『家』制度が廃止されて、はや半世紀もたとうというのに、いまだに本家、分家という意識が拭いきれず、自分は本家の子供だから、主人とは別に、本家の親たちと一緒に墓に入りたい、ところが、亡くなった兄の嫁が、貴方たちは別に墓を作ってくれ、といわれた、自分は本家の子供なのに、嫁の分際で怪しからん、という相談もあつた、自分だって嫁の立場のくせに。兄嫁の主張があたつている、と答えると、あんたは、どっちの味方なのと怒鳴られたので、くやしいから勿論貴方の味方ではないというと、またもや怒鳴られた。

しかし、長男が相続しても勿論差し支えない、他の親族が異議を称えなければ。

最近の問題は、高齢者の独居世帯とか、単身者世帯の増加であろう。こうした人たちは現行の墓地の契約では、折角墓所を求めてもやがて無縁になることははつきりしている。それでは、墓をつくる意味がなくなつてしまふ。自分の死んだあと、無縁として捨てられるのかとおもうと、あまりにも寂しい。

こうした人たちに対応するためには、地方自治体がその地域の、そうした人たちのために、墓を設けて、収容する必要がある。

そうして、自治体が年に何回か決められた日に慰靈祭を行う。長年その地域に暮らした人も、地域の貢献者である。せめて死んだあとは市なり、町なり、村が近親者にかわつて祭祀をするべきではないか。

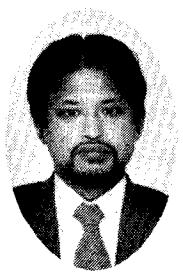
「振りかごから墓場まで」という言葉がある。

今までの我が国では、祭祀を個人にまかせてきすぎたとおもう。近親者が祭祀してくれる人はよい。近親者がない人たちは、やはり自治体が最後の面倒を見る必要がある。

私は、このことを声を大にして主張していくつもりである。

(ジャパンセメントリー・コンサルタンツ)

葬文研の宿題



横田睦

私が本会に顔を出す様になつてから、かれこれ十年以上経ちます。

確かにその頃の定例会は、まだ十回だか二十回を数えていた程度、でしたでしょうか。

当時のことを振り返りながら、最近の定例会の「賑わい」などを前にしていますと、実に感慨深いものがあります。

ただ、そうした一方、発足当初、熱く語られながら、未だに実現はおろか、今では顧みられることもなくなつてしまつた宿題の数々。例えば、「葬送博物館」といった構想などについて、ふとした拍子に思い出します。

確かに、私たちの業界は「しきたり」という様な、如何にも古臭い言葉が、しつくりと肌に馴染む処です。

しかし、実際には（会の皆さんには改めて申すまでのことも無いのですが）使われている道具などのハードは勿論、式の典礼というソフトの部分においても、実に目まぐるしく移り變る世界であります。

私が現在、禄を食んでいるお墓の世界においても、一三、〇〇〇とも言われる石材店の中で、近代・戦後の移り變わりについて記録・保存しているのは（『社史』の編纂という形も含めたとしても）殆ど無いでしょう。身近な歴史、日の浅い歴史というのは、存外忘れられてしまい易いものです。「産業博物館」というものがありますが、それを参考にして「我が

業界でも、これに類したものが必要なのではないか、『研究会』を称する以上、会がその母体になるべきではないか」という意見が会で交わされました。

この他、叶わなかつた宿題の数々を供養代わりに郷愁に浸りつつ「思い出」として語り進めたいところです。

しかし、「会史（に該当するもの）」は、別途、まとめられると、編集担当者より聞いています。貴重な紙面を重複した原稿で埋めることもないでしようから、昔話この程度で切り上げておくこととします。

代わって、ここは少々前向きに、或は今後の会の在り方にもかかわることとして、最近、本会のキャッチコピーにもなつてゐる（かの様に思われる）「開かれた葬文研」なる言葉について、少しばかり吟味をして締めくくりとすることとしましょう。

そもそも会はこれから一体、「何」に向けて「開かれよう」としているのでしょうか。

「無論、誰に対しても」なんて言わないで下さいよ。見世物小屋（木戸賃を払わねば、摘まみ出されてしますのですから）。（誰に対しても）開かれた葬文研」というのではあまりにも融通無碍、節操がなさすぎます。

それならば、と次いで「葬送に关心がある人」といった様な声が出そぐですね。如何にも「適格者」でござい、という感じですね。でも、少し考えてみて下さい。

良く「十年一昔」と言いますが、確かに一昔前、私が会とかかわる様になつた頃は、葬送にまつわる何事かを調べようとした時には、色々な苦勞があつたものです。

これが満更、小舅の「繰り言」とは言い切れぬ証左に、当時まとめられた報告・研究に改めて日目を通しますと「葬送について、特に現代葬送の状況をまとめられたものは無い」といった文言が、しきりに使われています。

そうした意味では、葬送に関心のある人に対する積極的なアプローチしてゆこう、というのは一つの見識でした。

しかし、今日はどうでしょうか。

少し大きな書店に足を運べば、現代の葬送について語った本は溢れる様です（と、言うには大袈裟にしても探すのに苦労しないはずです）。そしてその内の二、三冊も手に取れば、その奥付に関連文献、問い合わせ先が色々と紹介されています。また、各地の消費者センターでは、葬式や墓をテーマにした講習会がチョコチョコと行われています。

葬送に関する「関心」を満たす環境は充分に整っていると言えるでしょう。で、あるとするなら、本会が「開くべき対象が単なる「関心のある人」というだけでは如何にも物足りなく思われます。

こうした点を踏まえますと、本会に「集う人」とは、「関心がある」という程度の人ではなく、葬送が「好きな人」～先の宿題である「博物館」に重ねて言えば、古ぼけた道具が消えてゆくことを惜しむ人～（抵抗感を覚える人もいると思います）「葬送オタク」「葬送マニア」とでも言い換えることが出来る人の集まりであるべきである様に、私は考えています。とは申すものの、ここで「関心のある人」と「好きな人」について、厳密な違いを具体的に考えている訳ではありません。

恐らく、言葉足らずで誤解を受けるであろうことを予感しつつ、最近、何とはなしに感じていることを、この場を借りて文字に打ち並べてみたにすぎませんから。

それより、未だ実現していない「葬送博物館」への思いと、会は「葬送オタク」の集まりであるべきという主張は、うまく結びついたでしょうか？

初心に戻り、微力ではございますが、より充実した会となる様、お手伝いさせていただきます、「反省と抱負」らしきものを少しばかり述べてみました。

仏と佛はどう違うのか？



勝山宏則

ムはござる（肯定）、弗はあらず（否定）の意味である。ホトケは「人でござる」なのか「人であらずなのか、検証してみたい。

もともと佛は、人と音符「弗」（みわけがたい意）とから成り、ぼんやりしている意を表す。梵語の b u d d h a の音訳に仏陀が用いられてから、「ほとけ」の意に用いる。常用漢字は佛の異字体による。

弗は会意文字で「弓」（縛った紐）と「八」（そるかえる）とからなり、反り返って紐を振り切る意を表す。借りて、否定の助字に用いる。形声字の音符になるど、はらう（拂）、ふきだす（拂）、かすか（拂）、うしなう（費）などの意を表す。

対して「ム」は、物を囲った様で私有する。ひいて「私」の意に用いるものである。

（耜（すき））を源とするという説もある）

「私」という文字は「禾」（稲穂の垂れている植物の形にかたどり稻の意を表す）と、囲む意の「ム」とにより、囲って自分の物とした稻、ひいて「私」の意を表している。

弗の字を見て略してムにしてしまったわけで、ムには否定の意味も、「フツ」という音声さえもない。佛と仏についても同じ。仏では会意文字としての意味は見出せない。手と払いのける意味の弗でこそ意味が出

るのである。

ブッダという音に、佛陀をあてた中国人?は、その人間を超えた存在を見て、かつ、「ブツ」という音を聞き、佛を当てたのでしょうか。(誰か教えてください。) ちなみに、常用漢字の仏は、宋・元のころから用いられている俗字によるそうです。

この問題の、たねをあかすと、「部首としてのムには、一定した意味が無く、もっぱら字形分類のために部首にたてられる。常用漢字の広・仏・仏などは、もとは廣・佛・拂で、複雑な字形の一部を省略するためにムを用いているのである。」ということです。

私たち日本人にしてみれば、外国人の名に、音をあてただけの当字なわけですから、佛でも仏でも関係ないことです。しかし、本来の意味と正反対の漢字を平気で使っていると、漢字の持つ機能の半分を捨てていることになり、もったいない気がします。

私たちは、いつのころからか、香奐を香典と書いてはばかりません。
(奠:供える・敬う/典:儀礼)

しかし利便のみを追求し、意味を捨てるのは良くないことだとおもいませんか。

参考にした漢和辞典

旺文社・三省堂書店・岩波書店・大修館書店

私は、現在、葬送文化研究会のほか、表現社勉強会(隔月)、青年フューネラルフォーラム(年一回)、全互協・21世紀の互助会を考える会(年四回)に参加しています。

どの会にもそれぞれ特色のあるテーマがあり、まだ主だ駆け出しの私は、どの勉強会も欠くことのできない存在です。

葬文研は、青年フェーネラルフォーラムに初めて参加したとき、同会の

顧問でもある天野会長の紹介で門戸を叩かせていただきました。

初めての印象は、とても難しいテーマで全く発言することが出来ず、継続は困難という印象でした。会の雰囲気はアットホームでみな親切でしたが。

現在は、結論の出ない課題に果敢に取り組み、その後の飲み会でまた違った答えを知るという、正しい葬文研の楽しみ方を知りました。

文頭のQ&Aも天野会長から、食事中に頂戴した問題です(天野会長からは、このほかにも沢山の問題をいただいているのですが、答えを作らず、いつも怒られている始末です。(気にはしています。天野会長ごめんなさい。)

この会の特色は、あらゆる立場の人々がまんべんなく集まり、また、それぞれの意見を尊重し合っていることだと思います。特に、業界の長老や一流の研究者の方々の存在はとても大きいと思います。その一方、興味のある人には広く門戸を開き、対等に討論する機会を与えられているのです。今期より、幹事の一人として会の運営のお手伝いをすることになります。歴史のある会です。昔から続く良いところを是非とも守っていきたいです。皆様のお役に立つように努力いたします。ご指導ご鞭撻をお願いいたします。

(大成祭典株式会社)

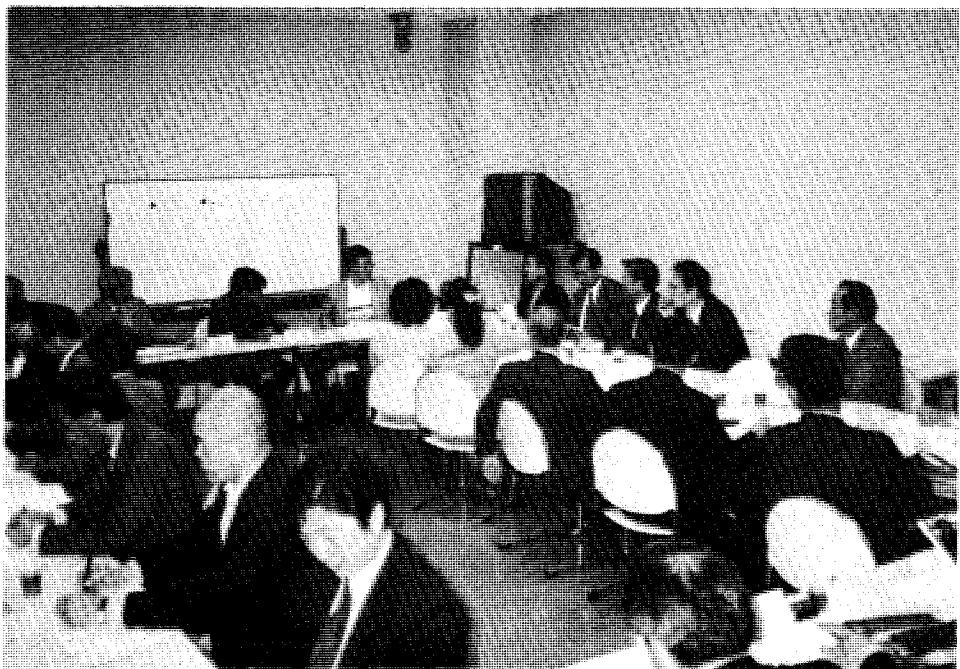
葬文研活動スナップ（1）



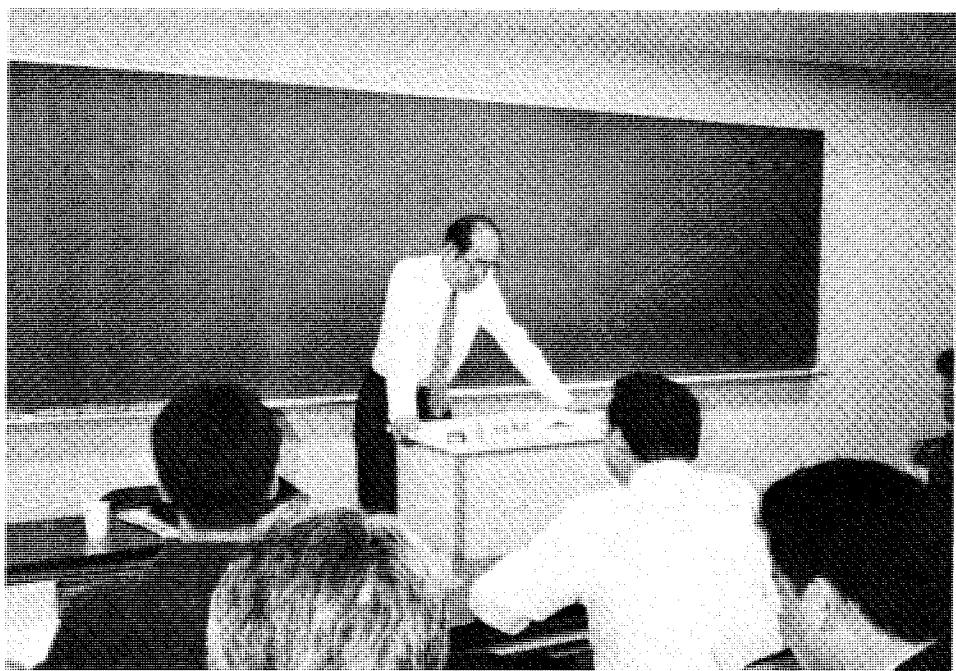
葬文研活動スナップ（2）



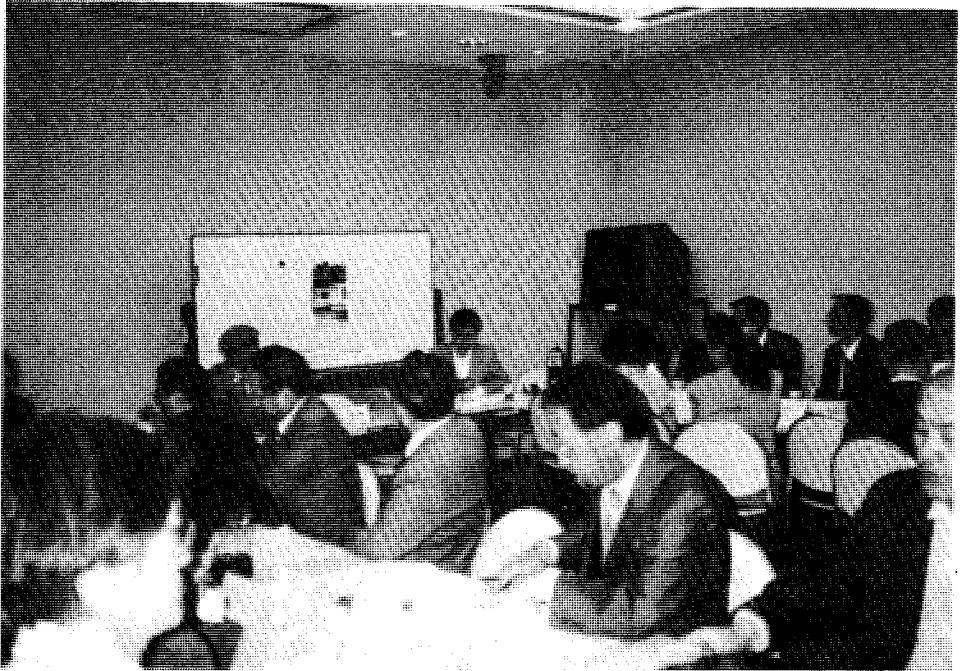
葬文研活動スナップ（3）



葬文研活動スナップ（4）



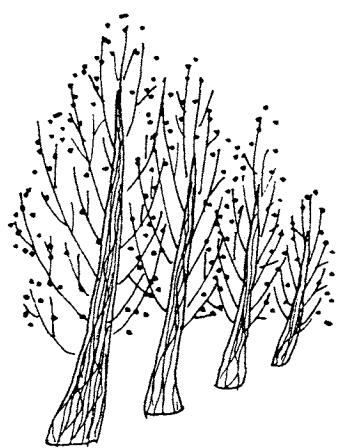
葬文研活動スナップ (5)



葬文研スナップ (6)



葬文研活動スナップ (7)



1997年度活動

1月総会	葬文研新体制発足	事務局の設置と会長・幹事・会計・監査・顧問を置く。 会則承認と新体制承認。・・可決。
2月～3月	事務局／幹事の活動	既存会員確認と新会員入会。 個人会員と団体・法人会員の種別に会員を分ける。
4月定例会 新体制第1回 通算139	「台湾の葬祭事情」 講師 天野 熟 氏 東京にっそう 社長 (葬文研会長)	4/17 千代田万世会館 天野氏の台湾視察旅行の報告 45名出席
6月定例会 第2回 通算140	「県境を越えた火葬場」 講師 浅香勝輔 氏 日本大学教授 (葬文研幹事)	6/17 東京電機大学 都市学／社会学見地からの火葬場立地 現状報告や行政とのかかわり。 43名出席
8月定例会 第3回 通算141	「宗教者から見た 現代の葬儀」 講師 後藤尚孝 氏 天然寺住職 (葬文研会員)	8/21 伝通院：織月会館 浄土宗の葬法、現代寺院の成り立ち、 僧侶の役割と葬儀について。 51名出席 (オブザーバー3名)
10月研修旅行 第4回 通算142	「沖縄葬祭現状視察」 講師 中西弘一 氏 (株)沖善社 社長 城間英幸 氏 沖縄袋中寺主幹 親泊元八 氏 (有)拓商 社長 比嘉 実 氏 法政大学沖縄文化研究所 教授／浦添文化研究所長	10/12-14 沖縄本島 2泊3日の研修。 沖縄各所の墓地見学／風葬跡の視察。 各講師を招いての沖縄の葬祭現状とその歴史講義 14名オブザーバー1名の15名参加
12月定例会 第5回 通算143	「現代墓地靈園事情」 講師 稲村吉彦 氏 ジャパン・セミトリー・ コンサルタンツ代表 (葬文研監査)	12/10 東京電機大学 墓地靈園の現状報告と業会／行政の かかわり。 43名出席

一九九七年 四月 定例会報告

台湾の葬祭現状報告

講演者・・・・天野勲氏

昭和五年東京生まれ。にそそう株式会社へ入社。昭和四〇年東京にそうと商号変更して独立。

冠婚葬祭用品の営業の中でも主に葬送仏具関連を長年にわたり扱う。

特に、その業務の傍ら、長野・山梨両県の葬儀協同組合設立に参画。以来多くの葬儀社と手を取り合って尽力を尽くされてこられました。

(長野県葬祭業協同組合 元顧問・山梨県 同組合 相談役)

とりわけ、葬送文化の変遷を独自に検証され、旧来から継承された葬送全般にわたる事例研究は、広い視点と深い洞察から各専門分野の学者、研究者から信頼をされた助言者となつておられます。

ベレーアマノのペンネームで、業界紙等に執筆連載をされておられる、「葬礼文化覚書」「葬喪メモらんだむ」は業界で評判を期し、豊富な体験を元に、各地の葬儀様式や葬儀知識を分かり易く解説しておられるだけでなく、随筆としても高い評価を得られております。

今回の、講演は2月に業界関係者と台湾へ赴き、現地葬祭業者との親しい交流の中からアジア的な視点で葬送文化を捉え、その現状報告と、それを元に我国との照らし合わせ等々、警鐘や特長紹介を含めた楽しい報告になると思ひます。

また、天野氏はこういう活動を含め、機会ある事に葬祭業者の若手後継者を育てておられる業界のご意見番でもあります。

現在、この葬文研会長として私たち会員の取りまとめをお願いしているだけでなく、青年フーネラルフォーラムの顧問として、幅広い活躍をされておられます。

今回、葬文研新体制の第一回定例会を開催するにあたつて、特に会長自ら貴重な講演をしていただけることになりました。

新体制初回の定例会と云うことで、天野会長に講演者をつとめていただき、現地で撮られた多くの貴重な写真を元に、変わりゆく台湾の葬祭現状を的確にご報告していただきました。私たちにとつても、なかなか現地まで行くような機会がないだけに、非常に価値のある講演となりました。

ご出席できなかつた会員には、祭典新聞の九七年4／10号、5／10号に細かな報告が記載されていますので、ご一読下さい。

また、定例会会場もいつもの電機大学とは異なり、千代田区にある区営の斎場「千代田万世会館」での集まりになりました。懇親会もその斎場の和室を借り、大変楽しく盛り上がり、各人それぞれが新会員の方々と楽しく談笑されておられました。

当日は午後6時からの開演で懇親会終了9時半となりました。

・・以上報告まで

一九六七年 六月 定例会報告

県境を越えた火葬場

浅香勝輔氏（葬文研幹事）による

*講演者プロフィール

浅香勝輔氏：昭和四年東京生まれ。

早稲田大学大学院文学研究科修士課程終了（史学専攻）。

現在、日本大学理工学部建築学科教授、工学博士。

専門は日本都市史・歴史地理学。著書の「火葬場」（共著）大明堂は

現在でも重版を重ねるロングセラー。

その他に「歴史がつくった景観」（共著）古今書院、「歴史教育とその周辺」（共著）法律文化社、「葬送文化論」（葬送文化研究会編古今書院などがある。

現在、隔月刊誌「SOGI（葬儀）」に「火葬場のある風景」を連載中。

新体制二回目の定例会と云うことで、会員の天然寺住職後藤先生に講演者をつとめていただきました。浄土宗天然寺住職として、檀家その他の葬儀に導師として、多くかかわり、「現代の葬送」に対する僧侶としての立場からそのハード・ソフトにわたって、ご意見を頂戴しました。また浄土宗の葬儀式についても専門的なお話を聞きました。皆様の素朴な疑問にもお答えしていただけました。

浄土宗の葬儀式の詳細や普段わからない寺院経営大変さなど、大変樂しくお話ししていただきまして当日は50名近い参加者以外に数名のオブザーバー参加者も加わり、講演後活発な質疑応答となりました。

今回の会場は伝通院様のご厚意により、新斎場「織月会館」を無料で提供していただき、その見学会も含めてボリュウムのある会合となりました。

会場も慣れた電機大学で、懇親会もいつもの「鳥はな」を借り、大変楽しく盛り上がり、各々それが新会員、ご来賓とともに楽しく談笑されておられました。

一九九七年 八月 定例会報告

宗教者から見た現代葬儀

後藤尚孝氏

昭和十七年東京生まれ

大正大学大学院博士課程終了（浄土宗）。

大正大学総合佛教研究所特別研究員。葬文研会員

戸松啓真著「徳本行者全集」全6巻の編集に従事。

現在、駒込（文京区）浄土宗 天然寺住職。保護司。

一九九七年十月定例会（十月十二～十四）報告

沖縄本島の葬祭現況と歴史・民俗

行程

十月十二日

東京出発組

集合八時十五分・・・羽田空港 国内出発ロビー中央口

八時十五分発 ANA81便 那覇行き（軽食付き）

十一時十五分着 到着ロビーにて下村氏・伊藤氏合流

十一時三十分

那覇空港出発

沖善社様お迎えマイクロバス乗車

十一時三十分 昼食・宮古そばと琉球庶民料理・・おいしい！
(地元の人が行く料理店。休日にもかかわらず)

十九時

夕食をしながら、引き続き座談会

二一時

終了。明日の打ち合わせとご案内

十月十三日

九時三十分

ホテル出発・・貸し切り1BOXタクシー2台

十三時 特別にその時間だけ営業してくれました。)
沖縄葬祭場見学（沖善社様所有）

実際に使用している収骨容器や棺など独特なもの見学。
周辺の一般墓地見学・・門中墓・亀甲墓等

時間やルートにより嘉手納基地等立ち寄り見学

馬天港

十八時

残波岬ロイヤルホテル着

琉球村見学

読谷村歴史民俗資料館 見学

十八時三十分

宴会場にて座談形式懇親会
テーマ「沖縄の葬儀現状」

出席：沖善社 社長 仲西弘一氏

浄土宗袋中寺布教所主幹 城間英幸氏

僧侶であり郷土史家の城間先生は沖縄の風習や儀礼、
ユタ等にも精通されておられます。

斎場御獄（せーふあーうたき）見学

主な著作

久高島遠望

玉城村（たまぐすく）

玉泉洞文化村・風葬地見学（特別）

ひめゆりの塔

琉球ガラス村

幸地腹門中墓・沖縄最大の門中墓

糸満市

十七時三十分 オーシャンビューホテル着

十八時三十分 琉球料亭「みらく」にて本格琉球料理

座談会・テーマ「沖縄の葬送民俗と先祖崇拜」

十月十四日

朝食後解散、出発まで自由行動

十九時 会食座談会継続

（株）拓商 社長 親泊元八氏
ゲスト 琉球文化研究所所長 比嘉実氏

比嘉先生略歴

昭和十八年沖縄県浦添市生まれ。

首里高校から琉球大学国文科卒業。

その後、法政大学日本文学科修士入学。

昭和5五十四、法政大学沖縄文化研究所助教授。

平成六年同所長。

平成九年浦添文化研究所所長。

十八時三十分 羽田着解散

十六時十分 那覇発ANA90便

首里城見学／守礼門／金城町の石畳／壺屋等々・
東京帰還組は

十五時四十五分までに那覇空港集合

「古琉球の世界」
「古琉球の思想」

「唐旅紀行—琉球進貢使節の路程と遺跡、文書の調査」
「小湾字誌」・沖縄タイムズ出版文化賞受賞

「沖縄風物誌」（共著）

「世界諺大辞典」（共著）

「南島歌謡大成（沖縄編）」（共著）

・・・など

沖縄の葬送を垣間みて

沖縄の墓

天野 勲

下村 侃

沖縄の宗教の中に本土の風習がかなり取入れられていることが個々かしこに見られた。それと戦後の産物である白木祭壇などもとり入れ近代化を図っているようだ。沖縄は昔、中国との交易が盛んであったので仏教よりも儒教思想が占めているのは思っていた通りであった。葬儀式のとき使われる白木位牌は、その場限りのものであり、墓地が大きく立派である。一つだけ、考えもしなかったことは、「香呂」を、葬儀の中心に考えているようだ。白木位牌は葬儀終了時焼いてその灰を、「香呂」に入れるということ。家代々伝わる「香呂」を、その時々に使用するということ。位牌を依りどころにした、靈魂を「香呂」に納めるという考え方ではないだろうか。

また死者には佛教による戒名をつけず、俗名が普通であること。佛壇店にて見せていただいた位牌にも俗名のみ。最近は寺院で戒名を授かる人もいるとか。いずれにしても祖先崇拜の心を子孫に伝えることが第一であるという。図書館の資料から得たことは、いまはあまり行われていない葬送の様子が書き記されている。葬列・喪服も基本の風習と同じである。沖縄に佛教が渡つてからなのかそれ以前からなのか。喪服の白から考えてみると、中国か台湾の風習が、渡ってきたものか、定かではない。私の判断の推測は、佛教の思想と共に渡つて来たものである。

(葬送文化研究会・会長)

葬文研十月例会は、十月十二日～十四日沖縄でひらかれた。光る空、青い海、気温二十七度湿度五十度、真夏並みの暑さ。第一日は地元沖善社沖西社長自らの運転で一行十五人、マイクロバスで墓地をたずねた。

沖縄の墓は、「亀の甲墓」といわれ、普通のエコノミー墓でも、敷地はおよそ百坪位はある。古いものでは石材はサンゴを使用。本土の墓は、主に個人墓が多いが沖縄では個人墓ではなく、先祖墓で、門中墓、つまり一族の墓ということである。四月五日の「清明の日」には一族が集い、広大な墓地で先祖を供養し、音曲などを交えながら会食し、一族の繁栄と幸せを確認し合う。

沖西社長の案内で同社の斎場ホールと、第三セクターで経営されている併設の火葬場を見学した。

葬儀の扱い件数は、月平均で約五六十件。火葬場は炉が六基、燃料は白灯油を使用とのこと。ちなみに火葬料は大人。四五、〇〇〇円とのことであった。ゲストに沖西社長。

第一日、夕食会では浄土宗僧侶の城間英幸さんを交えて、座談会が催された。ゲストに沖西社長。

その要旨は、沖縄の信仰は祖先崇拜であり、佛より神か。本土に比べて佛教定着は可成り後世とか。信仰の原点は古神、自然信仰。歴史的に長い間、移動がない民族社会であったとのこと。

第二日は、浦添石棺、斎場御嶽、玉泉洞文化村、琉球ガラス村、幸地腹門中墓などを見学。この中で特に記憶に残るのは知念半島山中にある斎場御嶽。これは古琉球時代、自然崇拜を信仰した頃の斎場跡で、一行は山中の小道を登り、自然斎場を見学、昔の琉球人の葬送を偲んだ。

玉泉洞文化村では沖縄の風葬跡を見学。一般にはオープンされてなく、特に許可を得て入場。山の中腹を削って岩場が造られており、死体がお骨になる迄そこに安置され骨壺に上げられる。戦前（昭和二十年頃）まで庶民は殆ど風葬であつたそうだ。

幸地腹門中墓は、糸満市の市街にあり、沖縄最大の亀甲墓。敷地は約一〇〇坪位、墓の建坪は約五〇〇坪位とか。個人墓ではなく幸地一門の墓である。そもそも亀甲墓は、母性の子宮を意味しており、母の腹から生まれ、死して再び母の腹に帰るとされる。墓中の室には一門の骨壺が並列。県外で死亡した一族の人は、直ちに門中墓には入れない。三十三回忌を終えて始めて祖先の墓に入ることを許されるという習俗が、今も受け継がれている。

第三日の夕食会も座談会形式で催され、地元葬儀社・拓商の親泊社長の設営で、琉球人大学の比嘉実教授が参加され沖縄史話を拝聴した。

琉球は古くから、中国、朝鮮、日本をはじめ東南アジア各国との中継貿易の役割的存在として続いてきた。中国明代に朝貢が始まり、一三七二年、公的に使節を交換し、中国南部（今の浙江省）の寧波（ニンポー）に琉球館が設置された。沖縄を訪問して、中国的情緒を感じさせるのも、このような歴史を持つているからか。

一六〇九年、琉球は薩摩藩の侵入により、沖縄諸島は分割され、以来、沖縄は日本の中の異国的政策を受け、幕末に至り、明治十二年に廢藩置県を迎、三〇〇年に及ぶ鎖国を終えた。沖縄ではこの薩摩の侵入以前を古琉球と呼んでいる。

さて、沖縄は現在米軍の基地があり、軍人やその家族が多く見られた。

私は二度目の訪問であったが、前回は観光で、今回は研修で沖縄の歴史や、本土では見れない習俗、葬送の文化に直接触れる機会に恵まれ、感慨を深めた。中でも巨大な亀甲墓（門中墓）は祖先及び肉親への敬愛精神の表れであり、その根底には儒教の影響が大きいことを思った。

（株式会社いのうえ 儀礼文化研究所所長）

沖縄と葬送の自由

杉山昌司

十月十二日から始った二泊三日の研修旅行に参加、駆け足ながら那覇及びその周辺の葬送に関する諸所の見学と、宿泊の夕食時に城間英幸・比嘉実の両先生の沖縄のお話を伺うことができ、有意義な研修を体験させていただいた。

旅の詳細については同行会員のそれぞれのレポートに依るとして、私は城間・比嘉両先生のお話から感じたことを書くことにした。

「沖縄の人達は昔から親を大切にし、親の親さらにその親と宗教に近いともいえる祖先崇拜を重んじる土地柄で根家（ネヤ）を頂点に子孫が末広に

広がるピラミッド型の一族を構成、そのつながりは非常に強い。しかし家の相続については、三つのタブーがあり、①兄弟重り②女元祖③他血交り、と即ち兄弟・女・他人には相続をさせてはならないと厳しく守り通した男系の封建性の強い社会でもあり、新民法に反するところがある生活環境ともいえる。

沖縄の宗教については、初づ仏教は十七世紀には上陸していたが、現在でも表には出てきてなく葬儀の司式者として僧侶が存在するだけで、仏教徒は数えるほどしかない。キリスト教も戦後米軍の駐留によって若干の信者がいるだけで、本来の古神道が現在に続いているといつてもよい。古い時代から現在「ノロ」・「ユタ」とはと呼ばれる女の呪術師が存在しており。「ノロ」は生を、「ユタ」は死^{トビ}と関したことの伺いごとを扱っている。(注・タクシーの運転手さんの話では、悪い「呪術師」がいるから伺いをたてることに現在では批判的だそうだ。)

したがって葬送に関しても、「ユタ」のみ御告げ通りに行うことが老人達に安堵と満足とを与えることになるが、多大な無駄ともいえる費用を若い世代の世帯主に負担させることが、是といえるか、非といえるのか。老人達がかつて世帯主であった時代から守り続けてきた風習と儀式の文化を、今の立場で一概に迷信と無視することで、老人が自分達の死後を案じ、残り少ない人生を不安と絶望とに追い込まれていくとしたら残酷なことであろう。宗教がからむこの問題は沖縄での近い将来、社会不安を生じさせることは明白で早急に行政的な協力が必要であろう。

以上両先生のお話のなかから一部分を私なりに解釈してまとめたものであるが、沖縄に限らず葬送というものが抱える問題は物心共に関係するだけに難しく、いろいろな立場の人達のいろいろな意見も多々あろうが、いづれにしても慎重な考え方が必要であると再認識させられた旅行であつた。

(筆が足りず間違った解釈をしている個所がありましたら御指摘をお願い致します。)

末筆になりましたが、この研修を企画・運営された幹事さん、沖縄の葬祭業者の仲西弘一・親泊元八両氏の現地での御協力、城間・比嘉両先生の貴重なお話し、楽しい旅行となつた同行の会員の皆さん等、この稿をお借りして感謝のお礼を申し上げます。

(あすか建築構造事務所)

沖縄の宗教と文化について

杉 浦 昌 則

沖縄の研修旅行に参加させて頂き、一般では見学出来ないところまで見ることができ、大変有意義な研修でした。

現在の沖縄は大きく分けて三つの顔を持つていると思います。
「戦争の傷跡」それに「米軍基地の存在」そして「神と祖先崇拜を中心とした、古き文化や自然と共存する生活習慣」である。

比嘉先生のお話の中に、「日本語はどこから来たか知らない。」とのお言葉がありました。が、日本の文化そのものを探る意味でも、そのルーツとも言える沖縄を我々はもっと知る必要があると実感させられました。

今回は、葬送文化の研究というテーマでしたが、葬儀形態も、そのものが独立して存在する訳ではないから、幅広く文化・風俗・歴史の全体を把

握していくことが学ぶ上で大切な姿勢となるでしょうし、また逆に、葬儀の歴史を通じて、その他の分野を知る有力な手がかりにもなっていくのです。それにもしても非常に奥の深い、又、興味深い研究だと実感致します。

我々有志のこのような真摯な研究が、現在の日本の葬儀の在り方に、より良い方向への舵取りに、少しでも貢献できたらこの上ない喜びだと思います。

比嘉先生のお話でも、琉球文化圏は北は、鹿児島県喜界島を北限とするとありました、現在の行政区画では二つの県にまたがっているが、私も何度か、奄美諸島を訪れたことがあります、このことは実感として頷けるものでした。

民族の固有の文化としては、共有する神があり、そして言語・歌・楽器・踊り・酒等にオリジナリティがあることが基準となるでしょうが、琉球文化には、どれも洗練された独自なものが存在し、ひとつの民族ともいえる高度な文化を持っています。

只、南北に細長い小さな列島のため、大陸や本土からの様々な影響下にあつたことでしょう。日本本土そのものも大陸から人や文化が押し寄せた訳ですが、文化伝播の仕組みとして、大きく二つの潮流があつたように思います。

アフリカ、マダガスカルに発する、アジアモンステンの大気の流れが、中東、インド、華南、朝鮮半島を経て、偏西風とともに、人や米作文化が押寄せてきた。これを私見で「風の文化」と考えます。亀甲墓が中国、華南地方にも存在すると、先生のお話もありましたが、大陸から東シナ海を経て、直接琉球に伝わる文化も膨大なものでしたでしょう。

数年前に和歌山に旅したことがあり、鯨の基地、太地を訪れたとき、海岸に漂着した様々な漂流物を展示した展示館を見学する機会を得ました。

その時私は、漂流物のあまりのバラエティーの豊富さに、びっくりさせられたのです。

椰子の実、リュウゼン香はもとより、ニューギニア辺りの漁で使われたような素朴な漁具から、ヨーロッパ船から流失したと思われる様々な日用品の数々、それは、生活必需品が全て揃ってしまいそうな感さえあります。沖縄でも、この黒潮の海流によって、想像以上に他国の文化情報を古くから得てきたのではないかと思われます。時には、物だけではなく、人間迄流れ着いてきたことは想像に難くないでしょう。斎場御獄（セーフアーウタキ）の森を昆虫学の先生が、嵐のあとに南方から飛ばされて来た蝶々を探しにやってくるそうですが、これを私は台風の影響を含めて「潮の文化」と考えました。先程の風の文化と、この潮の文化の交わるところで、時には政治的外圧を受けながらも、どこか南国的に明るい文化が醸成されてきたように思います。

先程の和歌山での旅で、熊野の那智大社を見て来ましたが、本宮と新宮とを総称して熊野三山となります、ここは、大陸的そして内陸的な風葬の文化圏と、南方から渡来した海人（あま）の水葬の文化とがぶつかり合う地點もあるようです。

那智は、海を見下ろす位置にあり、海の彼方のふだらく淨土を信仰し、飾り付けた船に乗せて水葬を行なってきたようです。精霊流しの習慣もこれに基づくものと思われます。

沖縄では、もう少しこの海人文化の痕跡が見られるかと思いましたが、全体に風葬に近く、遺骨に愛着心をもち、水葬の觀念は希薄と思われます。ただ南方の海人文化としての特色である女神信仰は、竜宮神の拝所が島のあちこちにあり、その影響が伺われるよう思います。

斎場御獄では、東方の神々が、久高島を経てこの地に来臨するといわれ、聖地にはたとえ王といえども男子は踏み入ることを許されず、限られ

た巫女だけが山を登る。

これは、耶馬台国の鬼道の女王、卑弥呼の世界かと見紛うばかりです。

沖縄の人々の精神文化について特筆すべき事柄として、実生活に今でも靈的な存在が大きくかかわっていることが挙げられます。靈能力を備えたユタと呼ばれる人たちが百数十人いるそうですが、靈界とこの世との係わりの中で生じるいろいろなトラブルを解決してまわって大忙しだそうです。殆どが女性で、やはり女性の方が靈能力が高いようです。

靈感は非常に弱い電波のようなもので、その受信機としての感覚は、現代人とくに都会に住む者には殆ど失われてしまつた器官だと思います。視覚、聴覚にしてもアフリカの平原を走る民族の数分の一でしかない。

自然とともにある沖縄の人が、本土の人よりも靈感に富むと考えるのは容易なことですし、生命力の強い女性がより勝っている事実も当然と思われます。

生きている我々全ての生活の上で、神や祖先に表される自然の偉大な力を畏怖し、又敬愛しながら、素直に受け入れ、そしていずれ誰もが死を迎えるにあたつて、死者に対し生き残った者が、順送りに魂の鎮魂を行っていく。それが生きている者の務めであり、私達この仕事に携わる者が、そのお手伝いさせて頂くというのが自然な姿ではないでしょうか。現在のように、遺族や仕事などの人間関係の方ばかりに偏重した葬儀のありかたは、やがて市民にそっぽを向かれ、他業種のそれぞれの分野から業界参入をゆるし、葬儀業が遺体処理業社としてしか、生き残れないとしたら由々しき問題であります。

魂の癒しと、遺族に必要な精神的ケアの二つの部分にどう応えられるかが、私達の課題であり、そしてそのヒントを大きく与えてくれた沖縄研修であったと思います。

(株式会社セレマ)

沖縄研修スナップ (1)



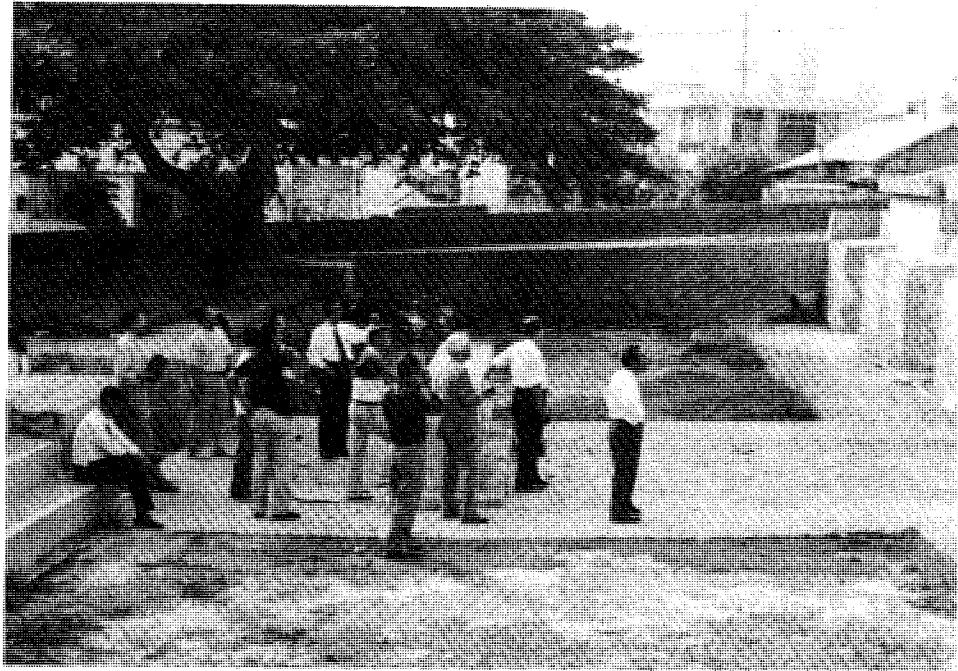
沖縄研修スナップ (2)



沖縄研修スナップ (3)



沖縄研修スナップ (4)



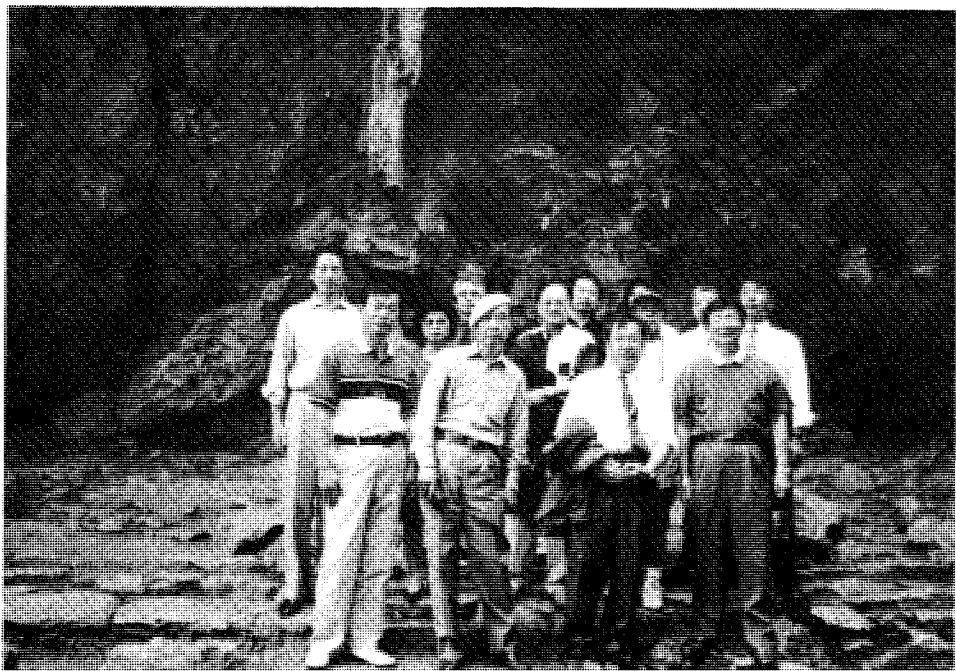
沖縄研修スナップ (5)



沖縄研修スナップ (6)



沖縄研修スナップ (7)



一九九七年十一月 定例会報告

現代墓地・靈園事情

葬具とその由来

講師紹介

稻村吉彦氏：昭和十年東京生まれ。

民営靈園を経て社団法人全日本墓園協会へ出向、
同協会理事。

現在ジャパンセミトリーコンサルタント代表

我が国の靈園、墓地墓石関係のエキスパート。

葬文研監査。

日本の墓地靈園事情について、詳しくお話をいただきました。

ふだんなかなか聞けないご講演と云うこともあり、地方からの参加も多
く、その後の忘年会では旧交を温め会うこともできました。

山田慎也氏：山田慎也氏：昭和四十三年（一九六八年）生まれ。

慶應義塾大学法学部法律学科卒業

同大学院社会学研究科博士課程卒業

論文：葬制の変化に対する一考察

葬制の変化と地域社会

死を受容させるもの

地域社会における葬祭業者・等多数

九五年一月表現社「SOGI」誌上にて・

地域社会における葬儀の変化一～六

第五巻一号～六号まで連載

九二年より現在に至るまで・東京都北区北区史民俗編
の編纂

九八年刊行される「日本民俗大辞典」吉川弘文館の民
俗学的な用語の辞書事項執筆

国立民族学博物館（大阪府吹田市千里万博公園内）勤務／講師を経て
現在 国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）勤務／助手

一祭壇を中心にして

1998年度活動と予定

4月13日(月)	懇談会	話題の葬儀について
5月12日(月)	定例会	仏教から見た葬儀の意味 講師…外部から招聘
6月 9日(火)	懇談会	葬儀の消費者意識について
7月14日(火)	定例会	中国の葬儀 講師…八木澤壯一氏
9月 8日(火)	野外研修	国立歴史民俗学博物館見学 (千葉県佐倉市) 講師…山田慎也氏
10月11日～13日 (日・月・火)	研修旅行	東北の葬儀と山内丸山遺跡を訪ねて (青森県) 講師…地元から招聘
11月 予定	定例会	葬儀用品の今と昔 講師…天野 熱氏
12月 予定	懇談会	グリーフ・ワークについて *忘年会
9月、1月／未定	定例会	終末医療とホスピス 講師…外部から招聘
2月未定	野外研修	葬儀関係メーカー訪問 ／祭壇・葬具の製作現場等
3月未定	定例会	定期総会

※予定ですので、変更の場合もあり

一九九八年四月 懇談会

記

3. 討識テーマ

話題の葬儀

昨今、多くの芸能人や有名人などが相次いでご逝去されました。

その葬儀施行は、一般の人たちを含め、私たち興味を持つて目にする機会があつたことと 思います。また、会員の中には、それにたずさわった

り、実際の現場を観察された方もおいでになることと 思います。

これまで、会員の皆様方が経験、あるいは関係なさつた数々の葬儀の経緯をそれぞれお話しいただきました。

一九九八年五月 定例会報告

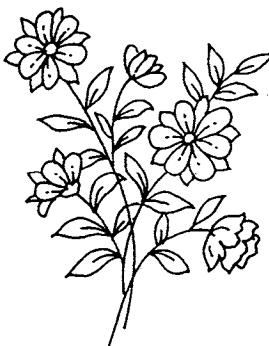
講演討議

環境問題と葬祭業界

講師：荒井保男（あらいやすお）氏

（有）博善社／日本エルツー（株）代表取締役社長

大正十五年生まれ。群馬県館林市出身。昭和四十八年より葬祭業界に従事。



昭和五十八年福岡県田川市に（有）博善社設立し本格的に葬儀社の経営に携わる。荒井氏は昨今問題になつてゐる火葬時に副葬されている処理物について、早くから環境汚染の問題として考えてこられました。

平成七年、安定化二酸化塩素を基剤とするL—IⅡに出会い、以来約三年間で、二〇〇体近いご遺体の処置にドライアイスを全く使わない葬儀を実践されてこられました。

独自のご遺体処置は二酸化炭素の拡散防ぎ、地球温暖化防止に寄与するものではないかと思ひます。これに基づき、平成十年日本エルツー（株）を設立され、その製品L—IⅡのメーカーとして全国展開のキャンペーンをしながら業務を開始しております。

環境に対する保護や保全をライフワークに、現在全力を傾注され活動中。ご講演に際して私たちは、新たに踏まえておかなければならぬ葬送文化の切り口として勉強させていただきました。

あとがき

葬送の概念



二 村 祐 輔

私たち日本人はこれまで死周辺の事柄について、ごく自然な対応を重ねてきたように思う。

事故などの現場には誰ともなく花が添えられていたり、またそれを広く報道することさえ、誰もが共通した想いでそれを受けとめる下地があると云つてよい。この違和感のなさこそ、私たちが持つ靈的な感覚なのではないかと思っている。

ここに日本人の靈魂觀をかいま見ることができる。

また岩や山、巨木などと云つた自然物についても畏怖や崇敬をもって、宗教とかかわる以前よりこれを執り祀ってきたことが伺われる。

現在私たちの宗教觀は多分に希薄な面もあるが、この点に深刻さがないのは、その背景にある独自の「靈魂觀」が、さほど古人とかわりのない心理として今でも継承されていると伝えるのではないか。

そういう根底から葬送の概念をもう一度考えてみたいと思う。

文明の発達は科学を基盤に多くの想像的願望を現実のものとした。その結果、物質的な豊かさは目を見はる進展をし続けている。この恩恵に「不

満」を抱く者はいない。けれどもこの延長線上に「不安」を抱く者は多い。

それは既に五感的な部分で行動をはじめている。総括的にあれば環境保護や自然回帰への活動がその発露だと思う。

豊かさの代償として私たちがなくしたものが多い。けれどもそれは体感できる自然ばかりではない。

私たちが失ったものの中でもっとも大きなことは「靈的なもの」に対する

日常的な想像力ではないだろうか？

現状行われている葬送の場面には、それが露骨に見え隠れする。

故人を偲ぶものとしての「類感」はもはや位牌からリアルな遺影に変わり、ところによつては映像化された生前の姿を式進行の中で見せられることがある。これでは故人を偲ぶための「想像力」は必要なくなる。見たまま、それだけが故人そのものになつてしまふ。その結果、自分なりの想いを故人に絡めることさえできなくなつてしまつた。また祭壇や葬儀周辺の無意味な装飾化に拒否反応を示す人も多い。こういう葬送システムの普及が葬儀から「儀礼」を奪つて「式典」化を余儀なくしたような気がする。

私たちの祖先は、故人の靈魂をある面では畏れ、ある面では慈しむ相反する気持ちの中で、葬送を日常とは切り離された時間の中で行つてきた。そして極めて特殊な緊張を強いられ、それを通過することで、死の重みを実感していたのではないか。

今、葬儀がアットホームな雰囲気の中で成されていることに多くの人が疑問や不安を持ち始めている。言葉では反論できない割り切れない気持ちのまま、葬儀そのものに価値を見出せないでいる。

ここでは葬送が儀礼としての意義と社会的な価値を喪失したように思われているのである。

伝承してきた死者との決別や隔絶の手法がないまま、生前からの延長線

上で追悼を、極めて日常的な空間で成されているところにこれまでの葬送の概念が見失われている。

「なぜ、葬儀をせねばならないのか？」と云う原理的な疑問に答えられる葬儀関係者は少ない。

葬送が「文化」の一翼を担うものと考えている人も少ない。

葬送の業務を世間的な忌避概念の克服で商売に結びつくと考えている人もいる。

靈的な配慮の手法や伝承を形骸化させ、排除することで新しいイメージを葬送に見いだす人もいる。

そこには先人がつちかってきた靈魂という目には見えない存在を無視した進行もある。

大衆は深層的な靈魂觀を満足させられない葬儀に、失望を抱くだけの知恵も先代から受け継ぐことなく、只、不安と拒否をじみ出させているだけだ。

これが進むと葬儀はイベントや単なる遺体の処理的作業だけに集約されしていくような気がしてならない。

葬送の概念を私たちがそれぞれ把握することで、それが長い文化に裏打ちされたものであることを認識せねばならない。

葬文研の役割もそこに見いだすことが出来るのではないかと考えている。ここに私なりに「葬文研」を位置づけて、今後の活動を発展させていきたい。

そのために会員各位のご意見、ご示唆を集約して微力ながら事務局としての責任が果たせればと思っている。

(葬送文化研究会・事務局長)



葬送文化研究会 会則

平成9年1月

第1条 [名称]

この会は「葬送文化研究会」
(略称 「葬文研」。以下本会という。)

第2条 [目的]

本会は各種の事業活動を通じて、会員相互の交流を元に葬送文化への関心と理解を深めることを目的とする。

第3条 [事業]

本会は、前条の目的を達成するために次の事業、活動を行う。

- (1) 会員相互の経験、知識及び意見の交換による研究
- (2) 研究会、講演会等の開催
- (3) 刊行物の発行
- (4) その他前条の目的を達成するための必要な事業

第4条 [会員]

本会の会員は、個人会員、法人会員とし、ともに会員とする。

本会の運営役員は原則として会員より選出する。

会員は規定の会費を納めなければならない。

会員は、本会の各種資料等の利用が要請によって出来る。

第5条 [入会]

会員になろうとする者は、所定の会費を添えて、入会申込書を事務局宛に提出し了解を得なければならない。

第6条 [会費]

個人会員は年会費12,000円とする。

事業活動参加は記名本人に限定される。

法人会員は年会費25,000円とする。

事業活動参加は記名企業名の社員であれば無記名にて2名まで参加できる。

会員以外の不定期な参加(ゲスト、見学参加等)については、
その都度参加費を徴収します。

第7条 [総会]

総会は次の事項を議決する。

- (1) 会則の制定及び変更
- (2) 役員の選任
- (3) 事業計画及び事業報告
- (4) 予算及び決算
- (5) その他、事業及び会の運営に関わる重要な事項

2項

総会(定例及び臨時)は会員総数の過半数の出席をもって成立し、
出席会員の3分の2以上の賛成挙手により議決するものとする。
この場合、委任状を提出したものは、出席とみなす。

3項

定例総会は、毎年1回開催する。

4項

臨時総会は会員の要請にて会長が召集する。

役員
第 8 条

本会には、次の役員を置き、原則として会員の中から選任する。

- (1) 会長 1名
- (2) 顧問 若干名
- (3) 幹事 15名以内
- (4) 事務局長 幹事の中から1名
- (5) 会計 幹事の中から2名
- (6) 監査 2名

任期
第 9 条

役員の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

選任
第 10 条

役員は会員の中から選出され総会の決議を元に承認されることとする。

職務
第 11 条

「会長」は本会を代表し、本会を統轄する。
「顧問」は会長、事務局長、及び幹事会より、会の運営に関する助言が求められた場合にこれに応ずる。
「幹事」は本会の運営に加わり、その職務にあたる。
「会計」は本会の收支を管理する。
「監査」は決算報告並びに事業報告を精査し、定例総会他、会員の要請による臨時総会時にその結果を報告する。

幹事会
第 12 条

幹事会は、幹事により編成し、本会の事業の運営にあたる。

事務局
第 13 条

本会の事務を処理するため、事務局を設置する。

退会
第 14 条

退会しようとする会員は、事務局あてに届出をする。

除名
第 15 条

以下の各項、何れかに該当する事を由として会員の除名を行うことが出来る。その際、総会での議決を経て、その旨を当該会員に通知する。

- A : 会費等の未納状態が続いている者。
- B : 自らの業務を目的として他会員に対する働きかけの甚だしい者。
- C : 本会の名誉を著しく損なった者。
- D : この他、本会及び本会々員に対して問題があるとされる者。

事業年度
第 16 条

本会の事業年度は 4月 1日から翌年 3月 31日までとする。

会計年度
第 17 条

本会の会計年度は 4月 1日から翌年 3月 31日までとする。

雜則
第 18 条

この会則規約は、平成9年4月1日より施行する。

葬送文化研究会会報 (第1号)

発行 葬送文化研究会

事務局

〒102-0081
東京都千代田区四番町6-3-311
TEL03-5215-5767
事務局長 二村祐輔

発行日 平成10年9月1日

編集 杉浦昌則 清水康 勝山宏則

印刷 日新社写真製版所

葬送文化研究会会員の皆様へ

平成10年9月25日

大変お待たせいたしました。葬送文化研究会の会報をお届けいたします。個人会員の方は1部、法人会員の方には2部お送りしました。

寄稿してくださった皆様はもちろん、会員の皆様のご協力により刊行に漕ぎつけることができました。まだまだ経験不足の編集委員ですが、より良い会報を作って行きたいと考えております。皆様のご指導とご協力を今後ともよろしくお願ひいたします。

なお、会員配布用以外に在庫が多少ございます。ご希望の方にはお分けできますが、配布価格が決まっておりません。後日発表いたしますので今しばらくお待ち下さい。(お急ぎの方はご連絡下さい)

葬送文化研究会 会報編集委員
杉浦 昌則・清水 康・勝山 宏則

おねがい

この郵便物は、会報掲載の会員名簿により発送しました。名簿の内容に間違いがあった場合は、至急ご連絡ください。

連絡先 発送担当 勝山

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-10-2 大成祭典(株)

TEL 03-3491-3711 FAX 03-3779-6939